

例中反応(+)のもの1例, 不変2例, 逆に負荷後摂取率低下を来したものの2例が注目された。経過追跡の1例では, 軽快後, 反応性上昇を認めた。

追加 中山喜弘(九段坂病院)

私は最近ネフローゼ症候群に Triiodothyronine を用ひて著効を奏した1例を経験しましたので追加します。

症例は昨年5月入院, ステロイド療法を続けていたのであるが, 間歇療法又は減量すると, 蛋白尿, 浮腫が現われ, 1年以上に亘るステロイド療法を中止することが出来ず困っていたが, 順大吉田助教授の suggestion に依つて, Triiodothyronine を使用したところ, ステロイドを用いないでも現在のところ2カ月以上も緩解の状態を続けている。この作用機序に就いては全く解らなかつたが, 只今の講演で, ネフローゼの際甲状腺機能の障害があることを伺いして, 合理的の治療であると考えた次第である。

24) 肝障害時の甲状腺機能

中島博徳, 倉持正昭, 新美仁男
牧野忠夫, 大田元政, 浦田 久
(千葉大)

近年肝臓と甲状腺の間に重要な相関々係のある事が種々の実験によつて暗示されている。我々は四塩化炭素胃内注入によつて, 急性肝障害を起した白鼠に I^{131} - T_4 を腹腔内注射した際に, I^{131} 甲状腺摂取率低下, 肝上昇, 肝中の無機 I^{131} 増加, 尿中 total I^{131} 増加, 尿中無機 I^{131} 減少等を観察した。又種々の肝疾患に於ける甲状腺機能即ち, I^{131} 甲状腺摂取率, PBI, T_3 赤血球摂取率, T_4 便尿中排泄率の5項目について検索した。

1) I^{131} 甲状腺摂取率: 肝炎初期に高く, 胆管閉塞では低かつた。

2) PBI: 胆管閉塞末期に低く, 閉塞性黄疸では正常, 肝炎では高かつた。

3) T_3 赤血球摂取率: 肝炎, 閉塞性黄疸で高値を示した。

4) T_4 便中排泄率: 閉塞性黄疸では非常に低く, 肝硬変では異常な高値を示した。

5) T_4 尿中排泄率: 全例正常範囲にあつた。

以上から肝は甲状腺ホルモンの調整器官として重要な役割を演じており, 肝障害により甲状腺ホルモン代謝の disturbance を起す事を明らかにした。

25) Thyroxine の便中過剰排泄の意義

中島博徳, 上牧順三, 福本泰彦
新美仁男, 牧野忠夫, 倉持正昭
塩川喜之, 村田光範, 中田益充
河野 靖, 岡田輝弥(千葉大)

昨年本学会で本邦児は欧米児に比し, 便中に thyroxine を浪費する傾向のある事を指摘した。吾々は便中過剰排泄の基本的意義を検討して今回次の如き予期し得なかつた新事実を発見した。(1) 白鼠に thyroxine 便中過剰排泄を齎す, セルローズ, 硫酸バリウム, 粘土等を食餌に添加すると, 徐々に(2週より2月)甲状腺重量及び I^{131} 摂取率の減少, 機能低下を思わせる変性萎縮像等著しい甲状腺抑制効果を認め, この際 PBI の低下, 外来性 thyroxine 及び triiodothyronine の利用率の亢進, 赤血球 triiodothyronine の摂取率の上昇等を認めた。(2) セルローズ添加食に過剰の KI を加えると KI 単独投与の場合に比し, 短期(10日)で逆に甲状腺は著しく腫大した。以上の結果の発生機序は現在の所不明であるが, 血中 thyroxine の重要な調整機構である hepatointestinal circulation が便中 thyroxine 過剰排泄のため擾乱を起こした結果と考えられ, 肝の脱沃度化機構が重要な役割を果たして居り, 沃度添加の場合は脱沃度化抑制が起こる事と関係があると推定している。

質問 有吉 徹(長野市)

本邦児の体位に及ぼす影響の可能性に就て昨年本会で示唆されているが, thyroxine 過剰排泄との関係はその後如何お考えですか。

答 中島博徳(千葉大)

本邦児の thyroxine 便中浪費傾向は昨年指摘した通りであるが, それが直ちに本邦児の体位に結びつくとは断言するには到っていない。併し可能性は現在更に強く考えつつある。現在動物で thyroxine 過剰排泄が甲状腺機能抑制作用がある事を明らかにしたので, 累代飼育に依り発育に対する影響が強くなつて行くかどうかを追求している。

質問 森 和夫(国立千葉)

大豆粉, 甜菜, 人蔘等は抗甲状腺物質を含み, goitrogenic に働くといわれているが, その定説となつている考えると, cellulose による成績とは如何なる関係になるのでしょうか。

答 中島博徳(千葉大)

御指摘の食餌は goitrogen として知られている。1957年に Middlesworth は大豆粉に依つて起る

high uptake goiter は便中 thyroxine の過剰排泄に依る feed back 現象に基く可能性があると Endocrinology に発表している。我々の成績では便中 thyroxine 過剰排泄では逆に甲状腺抑制作用がある事を明らかにしたので、彼の仮説は誤りであると信じる。従つて大豆粉に依る甲状腺腫の原因は別の機序に依るもので現在の所未だ明らかにされていない。甜菜、人蔘等は大豆粉と違つて low uptake goiter であり、甲状腺ホルモン合成を障碍する抗甲状腺物質を含んで居るもので、勿論便中 thyroxine 過剰排泄とは直接の関係がないと思う。

26) 病院内耐性病原性「ブ」菌の移推

°斎藤 三夫, 井口 正己 (葛飾日赤)

新生児未熟児室は病原性「ブ」菌保有が高率で職員の保有する耐性菌が新生児未熟児室内に蓄積を見る様でありまして、耐性「ブ」菌感染症発症の原因をなすものと思われる。

新生児未熟児室での抗生物質使用で「ブ」菌は選択適応現象より耐性を獲得し易く反面中止に依り耐性頻度が低下し易い事が見られ、抗生物質の使用には耐性頻度の低下、感性復帰を目標とした antibiotic policy を計るべきであると思われる。

27) 当地区に多発した無菌性髄膜炎に就て

岡田 宏一 (頸南病院)

昭和36年4月より当地区にムンプスが流行し(約150名)、内13例がムンプス髄膜炎を発症した。このムンプス髄膜炎は5月に始まり6月、7月に多発して8月に終わつた。一方耳下腺腫脹を伴はない無菌性髄膜炎が2月、3月に各1例づつあつたが、このムンプス髄膜炎よりやや遅れて6月より多発しはじめ、8月の9例を頂点として10月迄に18例発生した。このムンプス髄膜炎13例及び耳下腺腫脹を伴はない無菌性髄膜炎18例の総計31例の無菌性髄膜炎に就て、発病年令、発生季節、髄液諸性状、回復に要する日数等に就て比較検討した。その結果この耳下腺腫脹を伴はない無菌性髄膜炎は、血清学的にムンプス、日本脳炎、ポリオ、アデノビルス陰性であつたが、兄弟、友人間の発病各1組を認め、又病初多核細胞が髄液中に多いものがあつたり、比較的重篤な感じを与えたものが急速に好転したりしたこと等から、Grist が述べている様に、エコー・ビルス感染症ではなかつたかと推定している。

追加 中島 春美 (交成病院)

ヘルペス、ムンプスその他による随伴性髄膜炎以

外の本態的なものとして、L. C. M. ウィールスによるものの他、コクサッキー、ECHO ウィールスによるものが多く、最近(1952~55)欧米に於いてECHOによる本症の大流行が報告されている。1昨年本席及び小児科学会総会に於いて、東京中野に於けるECHOによる無菌性髄膜炎の流行を報告したが、本年度の総会に於いて2~3の本症の流行が各地より報告された。注目すべきことはECHOによるものの内、ポリオの如く永久マヒを起こすもののあることである。

演者の流行例も我々のものとよく似ており、今後この様な流行が各地に起こると思われる故、注意する必要があると思う。

質問 神田 勝夫 (君津病院)

耳下腺炎の合併症としての肺炎の診断方法をおたずねします。

答 岡田 宏一 (頸南病院)

腹痛と血清及び尿中デアスターゼ値を参考として決定しました。

28) 起立性調節障害に関する2, 3の考察

°篠本 直, 上林 直子 (船橋中央)

起立性調節障害例15例を経験し、年令的には学童期、性別的には女子に多く、体格は比較的痩せた子、或は pastös の子が多かつた。

又、自家中毒症のアナムネーゼをもつもの、感冒にかかり易いものが含まれていた。

起立試験を行なつた時の本症症例と非調節障害例との脈搏数の変動、収縮期血圧の変動、脈圧の変動には、かなりの相違があるように思われた。

治療としてカルニゲンを使用し、症状の改善を見た。

追加 神田 勝夫 (君津病院)

私も最近本症の6例を経験したが、これ等の例はいずれも種々の訴えをもつて長い間治療を受け学校も休みがちであつたが、本症と診断し治療することにより、自発症状も消失し通学し得るようになった。

29) 血小板障害症(既報)に併発せるネフローゼに就て

宮入 繁夫 (浦賀船渠病院)

昭和32年の千葉地方会に報告せる血小板無力症の男子(本年1月で14才9月)がネフローゼ症候群を併発して本年1月18日より治療中で、今まで